
戦国戦記 八犬伝

一条みつば

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦国戦記 ハ犬伝

【Zコード】

N4402C

【作者名】

一条みつば

【あらすじ】

広い広い下総国しもふさのくにを駆け回り旅する少年・信乃是、ある使命を背負つていた。それは、文字がはいった不思議な水晶を、あと一ヶ月以内に見つけること。信乃是、使命をまつとうできるのか。仮想の日本で巻き起こる、嵐のファンタジーをご覧あれ。

壱・犬塚信乃（前書き）

お正月のドラマであつた八犬伝とはかなり違う出来になつております。あらかじめご了承ください。感想もらえたなら嬉しいです。

壱　「犬塚信乃」

誇らしげに光る、「孝」の文字。手の平に収まるほどの水晶玉は、その一文字をありありと映し出している。

「うーん・・・こんなのが、見たことないけどねえ」

「そうか・・・」

見るからに不思議な水晶玉は、あっさりと持ち主の少年の手に戻ってきた。見た目より重く、握りしめるのにちょうどいい大きさ。「この文字の他に、仁・義・礼・智・忠・信・悌といつ七つの玉があるはずなんだけど・・・」

「そういう話、聞かないわ。こういう文字が入っているのは珍しいから、誰かが持つてたとしたら自然と尊になるはずなのよ」

そして少年の顔から目線を外し、女将は「孝」の文字をしげしげと眺めた。

「・・・それ、綺麗ね。買つたの？」

「いや・・・これはもらつたといつか・・・」

少年は言葉を濁した。俯くと、大きなつり目に陰りができる。あまり見せびらかすと、良くないかもしれない。

少年は水晶玉を巾着袋にしまいこんだ。口を紐でぐるぐると縛り、簡単に開かないようにして懐に入れた。

「すいません、仕事の邪魔して。それじゃ」

さつと踵をかえし、暖簾をくぐる。女将がまだ何か聞こうとしていたが、少年の目には入らなかつた。早足で歩くから、宿屋はあつという間に遠くなる。

（宿屋の女将なら何か知つてゐると思つたのに・・・）

散々町を歩き回つた挙句尋ねた最後の宿屋だつた。人が集まるところには噂話の一つくらいはあるだろうと油断していた。焦りのあ

まり、少年の歩みはしだいに速くなる。

この町は下総国の中にあつて西隣の武藏国に限りなく近い。毎年多くの人が出入りしているので情報を集めるには最適なはずだが、当たりがあるどこのかすりもしない。

（何でだ？安房国も上総国も探したのに、一つも見つからない・・・まだ遠くに行くべきなのか？）

歩みはさらに速さを増す。

（ここまで来ると四ヶ月もかかった。早くしないと）
突然、少年は胸のあたりに異変を感じた。さつきしまった巾着袋の中身が意志を持つかのように、熱くなったり冷たくなったりを繰り返している。まるで、持ち主を励ましているかのよう。

「・・・何だよ、焦るなって言いたいんだろ？でも、あと少ししないんだ」

水晶は、相変わらず温度を上げ下げしている。

「・・・わかつてゐるよ。『前に進め』、だろ？」

水晶はその言葉に納得したのか、熱は治まった。それと同時に、不思議と焦りは静かに退いていった。そして少年は前を見つめ、西へと歩を進めた。

残り時間は、あと二ヶ月

。

武藏国、石浜城。隅田川沿いに建つこの城は、馬加大記が城主となつてゐる。

「よいぞよいぞおーどんどん酒を持ってまいれ！」

城の中の対牛楼という建物から、囃子の音が聞こえてくる。女たちが軽やかに舞い、馬加の杯になみなみと酒が注がれた。

馬加は酒と女好きで有名である。今日も今日とて舞を楽しみ、家臣たちと宴をひらく。

「それ犬坂、お主も飲まぬか。適当に好きな娘を選んで、酌をしてもらえ」

ほろ酔いになつた馬加は、傍にいる護衛 犬坂旦開野に声をかけた。しかし、首を振つて断られた。

「私は酒に弱いので……」

「まったく、敵にはあれほど容赦の無いお主が酒を飲めんとはなあからかうように馬加が笑つた。隣の娘が再び酒を注ぐ。

「一杯くら」どうだ。バチは当たらん」

「いえ……」

今度は旦開野も笑つて返した。申し訳なさそうに、言葉を探しているように見える。馬加はぐいと杯を傾け、大きな溜息をついた。

「ああー、どうも納得がいかんのう」

「何か不都合でも？」

「お主のことじや」

「私……で」ぞこますか？」

旦開野は、訝しげに馬加を見つめた。

「まつこと納得がいかん。そんなに美しいのに、どうしてお主は男なののかの。もし女ならばわしが今すぐ正妻に迎えてやるのだが」

旦開野は、「惜しいの」と本気で悩む馬加を見て、美しい唇を綻ばせて笑つた。

「」冗談を。この犬坂旦開野、お館様に仕えることができて、男に生まれたことに深く感謝しております」

その言葉で、馬加は酔いも気分も最高潮に達したようで、大声で笑い出した。

「ははは、そうかそうか！やはりお主を家臣にして正解だったわい！それ、もっと注げ！」

隣の娘が愛らしい返事をし、徳利を傾ける。娘たちはますます煌びやかに舞い、周りの家臣も手を叩いて喜んだ。

今日も今日とて、宴は続く。

あれから数日後、無事に武藏国にたどり着いた少年は、市を中心
に水晶について訪ね歩いていた。

「そう、で、この真ん中に「仁」とか忠とか文字が浮かんでて・・・」「ふう〜む・・・齡八十のわしも、そんなものは見たことがないぞ

し珍しいの、

水晶をじつと眺めた。

「いつの間にか？」

5

「ふう～む・・・・・」

勝を総み　表ノは深く表方近ノ才

てねんたかに、彼の「」

老人は目をつぶり、さっきの姿勢から動かない。

なまじいさへ

2

「わなイヒヰ」—それが老人の返事だった。

仕方なく水晶を再び巾着に戻し、市を歩き始めた。

民衆が利用する市は、物資はもちろん情報も行き交う場でもある。

(安房国とは全然違うな……)

いたる所が荒廃し、土地は瘦せて作物は実らなくなつた南総の果て。暗雲が立ち込め、もはや太陽の光も地上には届かない。生まれ故郷は、死の国に変わつてしまつた。十六年間離れることなく過ごしてきた、愛しい地が。

『絶対、帰つてくる』

そう約束した。自分だけこの牢獄のような地を抜け出すことに嫌気がさしたが、それでも両親は笑つて送り出してくれた。

『前へ進め、信乃』

あれだけ頭を撫でられるのが嫌だつたのに、あの時ばかりは動かなかつた。石みたいに固まつて、父の手が頭から離れるのをじつと見ていた。前はもつと健康な肌色で、がつしりしてた右手。

役目を果たすまでは思い出すまい、とがんじがらめに縛つていた記憶の繩はあつという間に解けて、一つ思い出せばまた一つ、とひつきりなしに瞼に浮かんでくる。

だめだ。

頭をぶるぶると振つて、無理矢理故郷への思いを振り払つた。今は安房を思つより、役目を果たそう。

田の前に、再び市の騒がしさが広がつた。嫌にならない程度の雜音が、耳に飛び込んでくる。

（しかしアレだな、時間が無いのに色々考え込んでしまつて……。これつていわゆる『修行が足りない』つてヤツかも）

そのとき、前からやつてきた男にまともにぶつかつてしまつた。

「あ！すいません」

随分背が高い。細身で、無計画に伸ばした髪を低いところで簡単にひつつめている。

『気をつけるよ、坊主』

男は怒ることなく、一ツと笑つてそのまま歩いていった。なにやら上機嫌のようで、鼻歌まで聞こえてくる。

その姿が何となく怪しくて、何か掏られたかもしれないと懐をまわぐつた。人混みに紛れて金品を取るやつは珍しくない。あの男も

その類か　と思つたが、水晶の感触はちゃんと胸にあつた。財布も、何も盗られていない。

（なんだ、取り越し苦労か・・・）

一度財布を掏られた経験があるため、人を疑いやすくなつたかもしない・・・と感慨に耽つていると、懐に慣れない感触があつた。

「・・・なんだ、これ・・・」

取り出すと、手紙のよつたものだつた。表に宛名が書いてあるが、達筆すぎて逆に読めない。裏は差出人の名前のようにある。

「んー？ うま？ ・・・違つか、ま・・・く・・・馬加？」

どこかで聞いたような、聞いてないような。とりあえずこの手紙をどうしようかと考えていたとき

「待て　！！」

城の役人の大群が前からやつてきた。誰かを追いかけている。

「逃げ足の速い奴だ！ どこにいった？！」

あんな血相変えて追いかけられたら、そりや逃げるよなあとぼーっと眺めていると、役人の一人と目が合つてしまつた。しかも、自分の持つている手紙をものすごい形相で見ている。

（・・・・・・・・・・・・・・・・何だらう、嫌な予感が・・・
・・・・・・・・）

こういう時に限つて、人間は鋭い。そう思つた時には、役人が息を思い切り吸い込んでいた。

「いたぞ　！！！」

「ええ　？」

迷うことなく自分に突つ込んでくる。しかも大勢で。わけが分からぬまま、とりあえず後ろへ走り出した。

（何なんだ、一体！）

「馬加様の封書を盗みおつて、この小僧！！」

「俺はやつてない！ これはさつきデカい男が

「問答無用！ その手が持つている封書が何よりの証拠！！ 言い訳とは見苦しいぞ！！」

「話聞けってー！」

つてか、やつてないのに何で逃げてんだ、俺？

市を爆走しつつ、隠れる場所を探す。しかしどこにも人の目があった。

「つくしょー、俺やつてないってば・・・」

後ろを振り返ると、さつきより役人が増えていた。これは手紙を返しても許してもらえないところまでている。少年は自分が捕まつた時のこと想像して、ぞつとした。

そして後ろに気を配つてばかりいたので、前にも役人が待ち構えていたことに気付かなかつた。しまつたと思った時にはもう遅く、腕をしつかり掴まれていた。

「逃げるな！ 封書を盗んだ罪は重いぞ」

「俺はやつてない！ 離してくれ！」

懸命にもがくが、ますます締め付けられる。この騒ぎにわらわらと野次馬も集まってきた。

「俺は無実だつて

「つーーー！」

あれだけ人がいたのに、叫びは誰の耳にも届かなかつた。

ぴちゃん、と天井から水滴が落ちる。松明の火が辺りを照らしてはいるが、地中深く造つてある地下牢に太陽の光は届くはずがなく、明るいのはほんの一部だけである。空気がじめつとしていて、虫や鼠がいそうで気味が悪い。

（水晶も財布も荷物みんな持つていかれた・・・どーしょ・・・）
あのあと、『俺はやつてない！』とひとしきり叫んだがそれも空しく、石浜城の地下牢に力ずくで連行された。

ほんのお情けと思つていいのか、縄で縛られてはいない。しかし、鍵が何重にもかけられた目の前の格子を破る気にはならなかつた。

「・・・・・・・・・・・・・・おーい」

おーい、おーい、おーい・・・と問いかけだけが空しく木靈する。何十とある牢に入れられているのは自分だけと思うと、悲しくなってきた。こっちは手紙を盗むどころか、どうにかして持ち主に返そうとしてたのに。

「大体、あの『デカい男は何者なんだよ・・・』

「ニッと笑う、あの顔が忘れない。「氣をつけろよ、坊主」つてもしかしてこのことだったのか？！」

「あーもーイライラするな・・・牢屋つて想像してた通り嫌なトコだ」

この格子の向こう側から自分を見たら、さぞ滑稽なのだろう。

「どーやってここから出よう・・・・・・」

「どうしても出たいというならば、早く己の罪を認めることだな」少年は飛び上がった。地下に下る階段を、足音一つさせずに降りてきた人物。足元を照らす火を持つていないので、顔は見えない。

「え？！だ、誰

「そう飛び上がるほどではあるまい」

よつほど自分の反応が面白かったのか、肩を震わせて笑っている。声をよく聞くと男のようだが、少し不思議な感じがする。

なんというか 声に艶がある。

「・・・あんた、誰だ？」

背中をほんのりと濡らす汗を、手を握りしめることによって止めよつとした。心臓の音が耳に直接響いてくる。

「石浜城城主・馬加大記の護衛だ。 心配するな、ここで殺しはしない」

相手が一步前に踏み出した。美しい声に相応な美貌が松明の火に照らされた。

「お館様の大切な封書を盗んだのが、たつた十六の少年だったとはな。名前は・・・犬塚信乃、と言つたな」

口調に怒りはない。むしろ、「とんだいたずらっ子だ」と言う時のような言葉を投げてくる。

「俺は封書を盗んでない。市で男と肩がぶつかった時に、懐に入れられたんだ」

「面白い言い訳だな」

やつぱり楽しんでいる。

「お館様は怒つていいんだ。……といつより、誰が自分の首を狙うのかと戦々恐々としておられる。封書を盗むなど、誰かの挑発だ、とな。さあ、早くお前に盗みを働かせた者の名を言え」

そう言つとしゃがみこみ、少年 信乃と田線を合わせてきた。

近くで見ると、なおさら綺麗である。

「俺はやってない」

声が嗄れそうになるほど叫んだ言葉。黒幕も何も、自分の周りにはいない。信乃是目の前の男を一心に見つめた。

「・・・そんな怖い目で睨むなよ。・・・まあ、こじこじまで言つておいて何だが」

男は格子に顔を近づけ、声を落としてこじこじ叫びた。

「私はお前さんが封書を盗んだとは思つていいない」

「何だつて？」

信乃是思わず目を剥いた。

「封書の届け人が言う犯人の目撃情報と、お前さんの姿があまりに違いまするんだよ」

そう言つと、懐から折りたたんだ紙を取り出し、読み上げた。

「背が高く、細身の男なり。黒髪を後ろで束ね、年は二十から三十。肌は浅黒く、首筋に大きな痣ありと見る」

しかし自分の目の前にいる少年は、どう見ても年は十五、六で色は白い方。身長は年相応の大きさだし、痣も見受けられない。

男は紙と信乃を交互に見比べ、完全なる違いを確かめた。

「見てみる、人相書きもちゃんとできるぞ」

格子に向かつて突き出された紙には、市であつたあの男そのものが描かれていた。

「あー！こいつだ！……そういえば、ひらつと痣みたいなのも見

えた・・・

左の首筋に広がる赤黒い模様。刺青かと思ったが、ただの痣だつたらしい。

「だろう?」この男が どうこう目的でかは知らないが、濡れ衣をお前に着せたんだ」

「じゃあ何で俺はここから出してもらえないんだ?」「お館様のお許しがないからさ」

男はさらりと言つてのけた。

「あの人はこの人相書きの男とお前が仲間だと思いこんでる。だから簡単に出そうとしないんだよ」

目の前で、紙がひらひらと揺れる。信乃は恨めしげに平面な顔を睨んだ。

「・・・あんたはそういう風に俺を疑わないのか?」

「疑つてほしいのか?」

素早く紙は折りたたまれ、再び懷に戻つた。

「長年罪人を相手にしてきたカンだ。お前さんは盜人の目をしていない」

この少年の目は、合つた瞬間から真つ直ぐに自分を捉えた。逸らさず泳がず、奥を見つめられた 気がした。

「は? 目?」

「純粹ということだ」

「・・・・・・・・・・・・?」

信乃の反応がまたもや可笑しかつたのか、喉の奥でくっくつと笑う。

「まあ、私が何とかお館様を説き伏せて逃がしてやるよ。何の罪もない者を殺すのはさすがに忍びないからな」

膝を押して立ち上がつた。腰まで届く黒髪がサラリと流れる。出て行こうとして、ふと立ち止まつた。

「それに、お前は何か・・・親戚のよつな、『近い』って気がするんだ」

「親戚？何だよそれ」

犬塚家に、武蔵国にいる親戚はいない。信乃は眉を顰めた。

「名字のせいかもな・・・私の名は犬坂旦開野。大酒飲みの主人の護衛が仕事で毎日退屈だから、また来るかもしけん。お前と話していると、不思議と飽きない」

「い、犬坂？！ちょっと待つてくれ、あんた」

「すまんな、ちょっと所用があるから今日はここまでだ。待つてい

る、太陽が沈める日は近いぞ。犬塚信乃」

信乃が引き止める間もなく、旦開野は颯爽と階段を駆け上がりつて行ってしまった。再び地下室には信乃一人だけになつた。

「犬坂・・・旦開野・・・」

頭に浮かぶ、犬の文字。まさか

「ハ犬士・・・？」

口からついて出た言葉は、地下室の壁という壁に反響した。是か否か、返事をするように天井から水滴が一粒落ちた。

「なあ犬のネエちゃん、これで良かつたのか？」

「その呼び方はやめてくださいね・・・」

暗い夜道に浮かぶ一つの影と、聞こえてくる一人分の声。

「俺、盗みはあんま好きじやないんだよなー」

三日月はこちらを見下ろしている。夜空に星は見えない。

「・・・それにしてはずいぶん手際が良かつたようですが？」

半ば呆れたような声。この声の持ち主の影はどこにも無い。

「気のせい気のせい。まーあの飛脚、丸腰の人間が封書奪いに突っ込んでくるなんて、考えてなかつたんだろうな」

さも可笑しそうに笑う。首には大きな痣が襟元から覗く。

「しかし、私の『加護』が効くのはあと一ヶ月しかありません。信乃とハ犬士の誰かを会わせるには、こうするしかなかつたのです」「つーかあんた、その『加護』ができるんなら簡単にハ犬士を揃えられるんじやないの？」

「ふちつ」という音が、隣から聞こえた。

「そんなことできるものなら最初の一週間でどうにかしています！」

静かな夜に、怒氣を含んだ声はよく響く。

「でも力の都合で、二人しか出来なかつたのです！これ以上通信できる犬士を増やすと『加護』が続く期間は格段に短くなりますから！だから私が通信できるのは孝の水晶を持っている信乃が、信の水晶を持っている犬飼現八、あなたしかいないんですつー！他の犬士はどこにいるのかさえ分からないんですよー！」

黒髪を振り乱して怒る女性は、見たところ普通の女性のようである。　足が透けてなければ。

「・・・あんた、意外と短気だよなー」

現八は指で頬を搔きながらすたすたと歩く。隣で散々叫ばれて、ちょっと耳が痛い。

ふと急に、隣の気配がしなくなつた。振り返ると、透けた足は歩みを止めている。

「あと一ヶ月しかないんですね」

すでに四ヶ月が過ぎた。ただただ空の上から見守る四ヶ月が。

「信乃は私たちの思惑通り、石浜城に幽閉されました」

いくら少年とはいえ、場合によつては殺される。しかし、信乃自身の力にすべて任せた。

これは、一世一代の大博打。

「本当の犬士ならば、生きて帰つてくるはずです」

現八は、月を眺めながらこの話を聞いていた。上着の衿の下で腕を組み、じつと耳を澄ませる。

「今は信乃を信じましょう

月はあんなに明るいのに、星が見えない。一人の視線は自然と夜空の中央に集まる。

現八は、ニツと笑い、再び歩き出した。

「…………ま、ぼちぼち行こいや、犬のネエちゃん。もしかしたらあ
いつ、でつけー土産持つてくるかもしれないぞ」
「その呼び方やめてください…………で、何ですか土産つて」
「いや、何万分の一の確率で、他の犬士連れてくるかも、って」
「…………」
「連れてこない方に、百両賭ける」影無き女性は、心中で即
答した。

壱・犬塚信乃（後書き）

信乃たちの活躍を、どうぞ見守ってやってください。
よろしくお願いします。 みつば

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4402c/>

戦国戦記 八犬伝

2010年10月9日07時09分発行